
姫小路彩華の挑戦

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫小路彩華の挑戦

【Nコード】

N5079G

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

某人気ラノベ「涼宮ハルヒシリーズ」をオマージュした作品。とは言え、二次などではないのでご注意を。高校一年生の姫小路^{アヤ}彩^カ華は、美人だけれども摩訶不思議で、しかも元気な女の子。ある日、ウツトリと眺めていたのは……。

第一章 ダイヤモンドのティアラのために

一人の女の子が、桃色のバラとカーネーションの模様の書かれた布団にくるまっている。栗色の髪を指に絡ませながら、世界文化遺産全集のヨーロッパ篇のページを飽きもせず眺めている。彼女は姫小路彩華、現在高校一年生になったばかりで、通称はアヤカ。マリー・ポナパルトのティアラと呼ばれる宝石の散りばめられた冠の写真をかれこれ半時間も見つめていた。その大きな瞳は何度もまたたき、長い睫毛が忙しく上下している。綺麗な子、と呼べる風貌を備えているだろう。

「いいなあ、これ超欲しいってば……よし」

アヤカはその画像を携帯のカメラで撮り、夜も更けてくる頃に、遠く離れた父親の公一郎の部屋をノックした。返事を待つて入る。

「お父さん、お願いがあるんだけど」

ゴルフクラブを磨いていた父は、悪い予感がした。物心ついてからのアヤカの頼みごとは、なかなか常軌を逸した物が多かったからだ。恐る恐る聞き返す。

「な、何かね」

「ダイヤモンドがびっしり埋め込んであるティアラが欲しいの。ほら、こういうの」

と、早速さつき撮った画像を見せる。

「はあ、こう言うティアラが欲しいのか。うーん、なら探しておくよ」

「あら、きちんとダイヤモンドが敷き詰めてないと駄目よ？」

「無茶を言つなよ、いくら我が家が名門財閥でもそんなものは買えないよ」

「いーだ！どうせそんなところだろうと思った。いいもん、自分で作るから」

とだけ言つと、もうそこにいない。公一郎はため息をついた。基本的にいい子なのだが、いかんせん破天荒と言つか規格外と言つか妻のゆかりにもわしにもちつとも似ておらん。まあ、もう少ししたら落ち着くだろう、きつと、たぶん。公一郎はまたクラブを磨き始めた。

姫小路家はいわゆるセレブが集うような有名な高級住宅街にある。明治以前より精糖と精米産業で成功し、明治になって製鉄や船舶事業にも乗り出し、一大財閥を築き上げた。地元での名士であり、その邸宅は重厚なゴシック造りであり、歴史を偲ばせる。広大な庭には様々な木々が植えられ、ちよつとした庭園と呼べるだろう。今その小道をアヤカがすごい勢いで走り出てくる。

「遅刻しちゃうよお！てえい」

セーラー服を着込み、ミニスカートでもおかまいなしに赤い自転車にまたがった。左右を見ずに道路に飛び出す。

「お嬢様、鞆！鞆をお忘れです！」

と、執事の時田健介が大慌てで後を追う。もう六十歳にもなるが、趣味がジョギングなので足は強い。なんとかアヤカに追いつく。

「おおつとお。ありがとう時田の爺！」

急ブレーキをかけて止まる。その際にミニスカートが舞い上がるが、そんな事も全然気にしないのがアヤカだ。

「はあ、ぜえ。お嬢様、もう少しおしとやかに振舞ってください。

もう16歳なのですぞ」

「ふーんだ。爺はいつも同じ事ばかり。じゃあ行ってくるね！」

猛スピードで去っていく令嬢を見つめ、時田は一人つぶやいた。

「学校までついて行きたいもんじゃわい」

アヤカの通っているのは聖マリオヨッシ学園高校だ。自由な校風で知られ、進学校でもあるのだが、かなり個性的な生徒が集まっていたりする。

「ぎりぎり間に合った！おっはよおレイ」

彼方から長いベージュ色の髪を振り乱し自転車で爆走してきたアヤカは嫌でも目に付いた。

「あー、おはよう。今日も寝坊したわけね」

本当は自転車通学は徒歩で通える範囲の生徒はご法度なのだが、アヤカにはその類の校則など一切通じない、と言いか関係ない。

「違うの。そうだけ違うのよ」

瞳を星々のごとく輝かせアヤカは言う。幼なじみの睦月令二、あだ名はレイは、なんとなく嫌な予感がして、思わず背筋を伸ばした。このテンションのアヤカは大体何か空恐ろしい事を思いついている、と長年の経験則が言う。

「ワタシね、ダイヤモンドを敷き詰めたティアラを造る事にしたの。それで、その方法を調べてたら眠れなかったの」

レイは上っていた階段に足を引つ掛けて蹴つまずいた。

「なんだって？ダイヤモンドを散りばめた？ティアラ？そもそも王冠なんかで作るんだよ」

「これ見てよこれ、すごく綺麗でしょう」

と、昨日撮った画像をレイにも見せる。なるほど、と一応レイは思いはした。

「でも、別にダイヤモンドを散りばめなくてもいいんじゃない？」

「馬鹿ね。世界に一つのティアラをつけてる女子高生なんて超オシヤレじゃん？とにかくワタシはダイヤモンドをいっぱい手に入れないといけないわけ。その方法なんだけどね」

急に声を潜める。二人は一緒のクラスなので同じ教室に入った。

「ま、いいわ。お昼休みに屋上ででも話すわ」

そう言う自分の席へ向かい、早速友達とぺちゃくちゃと話し出す。レイは、どのような途方も無い計画を聞かされるだろうかと、と思うと自然と背中が曲がりがちになるのであった。

「歯医者巡りだと？」

昼休みに、屋上に来て、眺めの良い晴れた空の下で弁当の卵焼きを食べていたレイは、アヤカの計画を聞いてむせて卵を吐き出した。「そう。ワタシ調べたのよ。歯医者さんが虫歯の治療に使うキーンってやるヤツあるでしょ。あの先端にはダイヤモンドが使われているのよ。それを一杯集めればダイヤモンドのティアラの完成よ!」「すみませんが、それは窃盗と言う名の犯罪じゃないでしょうか」「は、犯罪。そう言えばそうね。やっぱり駄目か」「それにさ、歯医者者の器具の先のダイヤモンドなんか微々たる物だぜ? ちっちゃそうじゃん」

「ぬー。わかった、レイが盗ってくればいいのよ。そすればワタシは捕まらない」

などと涼しい顔で言いながらパスタをほおばる。俺はコイツのなんなんだ、手下か、とレイは自問した。

「とにかく、歯医者から盗ってくるなんてのは却下だからな」

アヤカはふくれながらうなづき、またぞろ思案を始めるのだった。

その日の放課後、アヤカは所属しているテニス部を休んでさつさと家に帰った。と言うか、テニス自体は好きだが殆ど参加していない。先輩にアーキヤー言われるのが大嫌いだからだ。言われない学年になったら行く、と決めている。帰るなり部屋に閉じこもり、インターネットを駆使し情報を収集する。アヤカの目に止まったのは、ボツワナ国であった。

「そうか、盗むのが駄目なら採りに行けばいいんだ!」

内線つきの子機で早速時田爺に電話する。ワタシのパスポートってどこにあるの、持ってきて、とだけ言って切った。電話を受けた時田爺は、これでもかと言うような胡乱ごらんな顔でパスポート片手にアヤカの部屋に向かった。白い、薄く花柄模様の入ったセーターに、黒の柔らかな生地まこのチノパンを穿いて、背中まである栗色の髪を後ろで纏まとめている姿だけは、まさしく深層の令嬢なのだが。などと思う時田爺に、アヤカは高らかに宣言した。

「爺、ワタシは今度のゴールデンウィークでボツワナに行くからあんたお供してね」

ボ、ボツワナ。それは一体どこの国だ。そこへ何しに行くのだ。

時田は鳩が豆鉄砲食らった後に落とし穴に落ちた、みたいな顔で聞いた。

「お、お嬢様、その国に何をしにいくのでしょうか」

「決まってるじゃない。ダイヤモンドを掘りに行くのよ!」

時田は、齢六十歳にして、赤道よりもさらに南のアフリカ大陸へ、穴掘りに向かうことになるとは夢想だにしていなかった。

その夜、プレステ3で遊んでいたレイの携帯が鳴った。見るとアヤカからである。

「もしもし、なんだ」

「あのさ、レイはパスポートぐらい持つてるよね?」

「さあ、去年韓国に観光で行ったからあると思うけど」

「よし決まり。ゴールデンウィークは開けといてね。あと、腕力鍛えとくのよ?」

「ちょ、何が決まったわけ?」

「ボツワナ行き。じゃ、ワタシ準備に忙しいから!」

とだけ言つと、電話は切られた。ボツワナ?何それ?おいしいの?レイは呆然とテレビ画面を見ていた。

五月の連休の初日、羽田空港には姫小路彩華、睦月令二、執事の時田健介の三人がいた。アヤカは軍服っぽいズボンに熊の模様のトレーナーを着込んでいる。レイはつなぎを着てきた。時田は工事現場の作業服のような格好である。

「ふふん。とりあえずどれだけ見つかるか楽しみね。何回も行けばティアラ一個分ぐらいは手に入るよね」

と、ご機嫌そのものなのはアヤカだけで、レイと時田爺はうつ病にかかったかのような雰囲気である。この旅行に真っ先に父の公一

郎と母のゆかりが反対した。と言うか掘っても見つからないぞ、鉦山はボツワナ政府や鉦産会社が権利を持ってるんだし、無駄だ、と言ったのだが、そんなのわからないじゃない、堀りに行くぐらいいいじゃない、と言うのに押し切られ、まあ、旅行と思えば、と言うことで、時田執事同行と言う条件で、許可が出たのだった。一方、レイはそんな暑そうなアフリカの国になんて、これっぽちも行きたくないなので誘いを断った。すると、

「レイって、そんなに冷たい人だったの。アヤカの事嫌いなんだ」と、指を噛みながら俯いて泣きべそをかかれた。こうなるともう男は負けである。ああわかった行くよ行きやいいんだろ、と叫ぶと、アヤカはにやつと笑ってそうでしょ、さすがレイ、と言いながらポケットに目薬をしまった。こういう経緯で、一行はアフリカ大陸の南の彼方の国、ボツワナへと向かうのだった。

ボツワナ国までは、日本からの直行便は存在しないので、ヨハネスブルクを経由せねばならない。そのヨハネスブルクに向かうにもドイツを経由せねばならず、南アフリカ共和国のもっとも栄えた都市に辿り着くだけで、丸一日以上かかった。その間、アヤカだけは一人陽気に隣の外人と友達になっていたりするのだった。レイは小説を読み、時田爺は字幕つき映画をひたすら見ていた。そして寝た。そして、乗り換えて、ようやくボツワナの首都ハボローネへと辿り着いた。

「ふうーっ、やっと着いたか。暑いなやつぱり」

レイはつなぎの上を脱いで、Ｔシャツになった。時田爺も上着を脱いで長袖シャツをまくった。アヤカもトレーナーを脱ぐ。思った以上に洗練されているのにびっくりする。高層ビルが立ち並び、道路も整備され、街行く人々もお洒落である。

「土人みたいなのが腰に干草巻いて槍持ってるイメージがありますなあ、アフリカと言うと」

と、時田爺が言うのもある意味無理は無いが、後にこの国の真実

を思い知る事になったりもするのだが。

「アヤカ、で、ここからどうするわけ？」

「まず予約を取つといったホテルに行くよ。それからホームセンターに行つて買い物よ。出陣は明日以降の予定」

とりあえず今日は穴掘らされずに済むか、と一安心する二人であった。ハボローネ市内のホテルに荷物を置いて、三人は地図片手にうろつく。半端でなく暑い。なんとか金物屋らしき店でバケツやシヤベルを購入した。そして、明日から行動、と言う事でホテルでトランプなどして時間を潰した。

「向かうはジュワネング、世界最大のダイヤモンド鉱山よ！」

白のタンクトップに「必勝」と書かれた鉢巻きをしたアヤカはホテルから出るなり大声で言った。レイも時田も恥ずかしくて仕方なかったが、どうせ日本語だからばれない、と気づいた。ここから直線でおよそ百キロ。が、道なりに向かうので実際は倍ぐらいあるだろう。

「お嬢様、結構時間かかりますよ」

と言うと、二時間でも三時間でも平気よ、ようやくダイヤモンドが手に入るのなもの。と涼しい顔で言う。そして、実際タクシーが走り出すと、車自体が少ないから運転手が飛ばすの何の。二時間足らずであつという間に目指すジュワネングに到着した。山あいの手前の場所で、軍隊らしき組織によって検問が行われている。ここから先は観光客も一般人も入れないらしい。

「何で入れないわけ？入れないと掘れないじゃないの」

と、タクシーを降りたアヤカが日本語で言つても、精悍な黒人兵士はノー、ヒアイズオフリミットとしか言わない。

「よし！例の作戦の時ね！」

と言うと、腰のポシェットから封筒を取り出す。続いて降りたレイと時田は顔を見合わせた。まさか……。

This is given and send in, pl

ease .」

「賄賂わいろかよ！」

「お嬢様あ！」

黒人兵士は受け取らず、おでこに血管を浮かせてヒクヒクさせている。

「やばい、ちよつと切れてる。よし、ここは一旦撤収よ」

そうしましょうそうしましょう、とレイらはアヤカを引きずって待たせておいたタクシーに戻った。その間ずっと黒人兵士はこちらを睨んでいた。

「どうしよう。アフリカの黒人のくせにお金に転ばないなんて想定外だわ」

「その差別的発想がそもそも間違ってるんだよ」

「物凄いマシンガン装備してましたぞ、あんなので撃たれたら体中穴だらけにされてしまいますわい」

「・・・一旦帰りましょうか。あ、ちよつとその辺適当に掘ってみようか」

「やだよ」

「嫌です」

アヤカが号泣したので、二人はしょうがなく炎天下のボツワナの焼け付いた大地を少々掘ってみた。当然何も出なかった。

「しょうがない、最後の手段のために、とりあえず一旦帰りましょ」

三人はハボローネのホテルへと一旦戻った。アヤカは言う。夜中に忍び込むのよ。それが無理なら諦めるわ、と。どうせ見張りは24時間体勢ですよ、と時田が言っても聞かない。しまいにはフォークだナイフだ投げてくるので、しょうがなく夜襲を行うことにした。どうせ無理だからこれで帰れるや、とレイは思っていた。

再び真夜中の二時頃、三人を乗せたタクシーがジュワネングに着いた。少し手前で降ろしてもらい、待機するようにいい、三人は恐る恐る検問所に近づいた。暗闇なのだが、幸い月夜なので足元は見

える。夜中なので、懐中電灯なども買ってきたが、今は付けられない。

「あつ、誰もいないよ。ラッキー」

本当に検問所には誰もいない。ただ、門は閉まっている。

「これなら柵を越えたら中に入れるよ、行くよ、ダイヤモンドティアラのために」

ちつとも行きたくない二人だが、ここまで来れば死なばもろとも的な蛮勇を振るい、柵を越え、中に忍び込む事に成功した。

「もっと奥まで行かないと採掘場には辿り着けないな……」

「

と、レイが独り言を言った瞬間、向こうのほうの空き地で歓声が上がった。人だ。四人ぐらいがこちらに走ってくる。真つ暗な中を黒人の警備員達が影のごとく、凄まじい速度で走って来る。その恐怖と言ったらただ事ではない。しかもこちらは不法侵入者だ。捕まったら丸焼きにされて食べられるに違いない。もつともアフリカについて無知である時田爺は本当にそう思った。向こうも早いが逃げる三人も早かった。計測したら100メートル走の日本新記録ぐらいは更新したかもしれない。転がるように柵を越え、スコップとかは全て投げ捨て、疾風のように逃げ、タクシーに転がりこんで、寝てるタクの運転手を起こして発進させた。後ろを見たらまだ追ってくる。殆どホラー映画である。アヤカは大きな息をついて少し震えている。レイは思わず肩を抱きしめた。幸い、と言うか、さすがに漆黒の追跡手たちも自動車には追いついてこず、三人を乗せたタクシーは朝方にはハボローネへと到着するのだった。もう採掘はあきらめる、との鶴の一声で、三人は日本国へと帰っていくのであった。

やがて連休も終わり、学校が再開した。アヤカはと言うと元々色白なのだが、ザンビア旅行のおかげでほんのり赤く日焼けした顔を傾けて、何事かを授業中に思案している。アイツ何考えてんだろな、とレイはその背中を見つめながら思う。タクシーの中で震えている

アヤカは可愛かった。思わず抱きしめた時、こんなに細いんだ、と驚いたのを覚えている。俺はなんだかんだであいつの事が好きなんだろうな、と思った。その恋愛相手が、ある日の朝、教室に入ると満面の笑みで近づいてきた。

「おはよう。レイ、ワタシ遂に見つけたよ。」

「おはよ。何を？」

「ダイヤモンドの作り方よ。何のことはないわ、もう実際に人の手でダイヤモンドを作ることはできるのよ！」

実はレイもそれは知っていた。ネットで検索すると案外あっさり見つかるのだが、どうもアヤカにはそれがなかなか見つからなかったらしい。

「でもね、造るのにはそれなりの設備がいるらしいの」

「そりゃそうだろう。簡単に作れるならみんな作ってるよ」

「これを見てください？」

と、アヤカは一枚のA4用紙をレイに渡した。表題に「CVD、化学気相法によるダイヤモンド結晶の作り方」とある。難しい化学の専門用語が多くてなかなか意味がつかめない。

「ここに赤線が引いてあるでしょ？」

その部分には、“ダイヤモンドの結晶は、高圧力の下で成長し”とある。

「つまりよ、強い圧力をかけて、後はメタンとか水素とかの化合物を集めれば、ワタシでもダイヤモンドが作れるってわけ！」

「そ、その圧力ってどれくらいなの」

「あれを使うのよ」

アヤカが白い指で指した先には、相撲部期待の星の大山巖三郎がいた……。

「ちょっと、サブちゃん、いいかな？」

いきなりサブちゃんと呼ばれた巖三郎はびつくりした。アヤカの性格は同じクラスだからなんとなく知っているけれども、そんなあ

だ名で呼んでくるとは思いもしない。どう返事したものが巖三郎が迷っていると、アヤカが一人でペラペラと話す。

「ワタシ、今とっても欲しい物があるの。そのためにサブちゃんの立派な体格が必要なの」

「え、え。俺の体格？何？」

「あのね、あるものをギューツと押して欲しいの、一定時間、10分ぐらいでいいと思うんだけど」

「あ、それぐらいなら、いいけど」

「よっし決まりね。準備出来次第お願いするわ。明日かあさつてかね」

と言うと、風のごとく去っていった。窓際にいたサブちゃんこと巖三郎には何かなにやら、であった。遠くでそれを見ていたレイは一人ため息をつくのであった。

二日後、巖三郎はアヤカの家招待された。部活動を終えた夜七時頃、校門の前に待っていると、Cクラスの真っ黒のベンツが停まった。中には、アヤカとクラスメイトのレイがいる。

「お待たせー」さ、載つてのつて」

「ど、どうも。やあ、レイ」

「オス、悪いな、疲れてるだろうに」

車が発進した。助手席にレイ、後ろにアヤカとサブちゃんだ。アヤカはどこで手に入れたのか白衣のような物を上に着て、伊達メガネもかけている。

「いったい、俺は今から何をするの。モノを押す、って言ってただ」

「イエス。今からサブちゃんには押す、と言うかあるガラス瓶の上に座ってもらうわ」

「何のために？」

アヤカは、前髪をすばやくかきあげながら

「ダイヤモンドのティアラのために！」

「ご本人は得意満面なのだが、レイとサブちゃんにはその自信の出自は一切わからないのだった。」

やがて、大豪邸である姫小路家についた。アヤカに案内されるままに着いて行くと、一階の奥の子部屋についた。ドアを開けたとたん暑い。暑いを越えて熱いという感じがしつくり来る。中には、円形の風呂桶ぐらいの大きさのガラス瓶が二つ、丸型の電気ストーブの上に置いて熱されている。

「うへっ、なんだここはよ、サウナかよ！」

レイが言いながら上着を脱いだ。日本のどこに五月半ばにガンガン暖房を入れている部屋があるか。アヤカ本人はしらつと白衣を脱いでＴシャツになって、サブちゃんにこのガラス瓶を１０分ほど押ししてくれる？などと言っている。サブちゃんは極めて人がいい事で知られているが、さすがにうんざりして、断って帰ろうと思った。

これを１０分押す程度でダイヤモンドなんかできるわけないのは子どもでもわかる。と、言おうとし、アヤカのほうを見ると満面の笑みだ。まったく自己の実験の失敗を考えていないらしい。サブちゃんはその屈託の無い笑顔に負けた。黙って１０分間ガラス瓶を上から押した。漏れてくるガスの匂いがあるととも言えない。かすかに鼻腔をつくこの匂い……。レイも同じく横にいたので気づいた。

「まさか、おい、アヤカ。この匂い、まさか、メタ」

ン、まだ言おうとした瞬間に、電気ストーブの火花にメタンガスが引火した。爆音が部屋中に響き渡った。真っ黒な煙が部屋を包んだ。

しばらくして、煙が晴れてきた。三人ともススで真っ黒になり、髪の毛はドレッドパーマを当てたがごとくになった。

「メタ、ン、ガスでしょ。つつ、使ってました。ゲフ」

アヤカが口から黒い煙を吐き出した。釣られて、サブちゃんが笑い出した。レイも、笑うしかなかった。三人の笑い声にかぶさるよ

うに、消防車のサイレンの音が鳴り響いて聞こえてきた。

しばらく経って、レイは元気のないアヤカに貯金をはたいて通販で買ったイミテーションのティアラを贈ってやった。二人で帰る放課後の事だ。

「ほら、これあげるから、これで我慢しなよ」

「何よ、こんなチープなティアラなんていらないんだから」

とか言いつつも、さっさと鞆にしまう。レイは内心笑みを浮かべていた。

家に帰りついたアヤカは、早速さっきレイにもらったティアラを頭に着けてみた。案外可愛らしいじゃないの。レイ、やるわね、思いながら、アヤカはそれを大事そうに化粧箱の前に飾った。

（第一章 完）

第二章 幽霊を捕まえる！

ある夜、姫小路彩華は自分の部屋で、冷蔵庫にあったシヨコラケ
ーキを口いっぱい頬張りながら、テレビの特別番組を見ていた。「
木曜特集 怪奇の心霊写真！今夜あなたは眠れない！」と言う代物
で、首のない人物の写真やら誰もいないはずのマンション五階のバ
ルコニーの後ろに人が写っている写真やらがドンドン紹介される内
容で、普通なら年頃の女の子は怖い怖いと声をあげそうなものだが、
アヤカは違った。

「ふーん、幽霊ってやっぱりいるんだなあ。見てみたいなあ。」

アヤカは生来霊感というものが無いようで、一度も幽霊と言うも
のを見た事がない。金縛りというものも聞いた事があるが、なった
試しもない。

「そう言えば、クラスメートのアオイは霊感が強いとか言ってたな」
アヤカの両目が怪しく光った。テレビは見ているが、もう内容は
わからない。忙しく瞬きを繰り返し、何かを考えているのだった。

先日のメタン爆発のせいでアヤカの髪の毛はすいぶん短くなった。
そのショートヘアーをなびかせて、スキップをするかのように聖マ
リオヨッシ学園に向かう。歩きしな、レイと、その友達の三上祐貴
と出会う。ユウキはメガネをかけていて、おとなしいけれども、性
格のいい、物知りな子だ。

「おはようっ。ねえ、ワタシいい事思いついたのよ。二人とも協
力してほしいの」

朝一で会うなりこれだ。レイは、この前の爆発騒動にもまるで動
じない彼女の芯の強さに感心したというか呆れたというか。おかげ
で髪の毛をショートモヒぐらいにまで短くする羽目になったが、ア
ヤカにはそんな事はどこ吹く風である。

「おはよ。何かまたワンダフルなことですか」

「ふーん。そうよ。上手く行けば大もうけ出来るし、人類史上初の快挙よ！」

「ロケット作って月に行く、とかじゃないだろうな」

「ノンノン。まあ、詳しい事は後で教えるわ。お楽しみ♪」

ちつとも楽しみではない。レイとユウキは目を合わせて苦笑した。

「アオイ、ちょっとちよつと。聞きたい事があるんだけど」

一時限の終わった後の休み時間。アヤカは自分のイスを蹴倒す勢いで、クラスメートの羽野葵の下へ飛んでいった。アオイは、ゆつくりとアヤカに視線を合わせた。マイペースでおしとやかで、アヤカと対極にいるような子だ。黒々と輝く髪の毛は二つにくくって、いつも少しだけ笑みを浮かべている。

「何かしら？」

「アオイはさ、靈感があるって言ってたよね？色々見えるの？」

「ああ、、うん、体調にもよるけど、強い場所に行けばいっぱい見えるけど」

そこまで聞くと、アヤカはニンマリした。

「と言う事は、幽霊がいたらわかる、ってことね？」

「わかる、時とわからない時、があるかな。妹のほうに靈感強いかもしれない」

「その妹について詳しく！！」

その後、アヤカはアオイの妹の紫苑しおんのほうに靈感が鋭く、いつでも見てる、と言う話をした。シオンちゃんはまだ九歳だそうだ。

「なるほどねー。よし、じゃあ妹も連れて来てね。バッチリだわー」
「どこに？」

アオイには事態が飲み込めない。と言うかわかってるのはアヤカだけ。アヤカはスカートの裾を延ばしながら、こう言った。

「幽霊を捕まえて動物園に売るのよ！」

レイはハンドボール部に所属している。余り顧問が熱心ではない

ので、練習が週に三回しかない。今日はその練習を終えて、運動場の手洗い場で顔と手を洗って、更衣室で着替えて仲間と帰ろうとすると、校門のところにアヤカとユウキが立っている。まさか俺を待ってたのかな？と思い、近づくと、

「お疲れ様、さ、帰りましょう。と言うか、行きましょ」

といったかと思うとズンズン先を歩き出す。何がなんだか、どうなってるの？とユウキに聞くと、

「うむ、今から戸野総合病院跡に下見に行く事になったらしい」

「何の下見？つか、お前は部活入ってないじゃん、まさか？」

「、そのまさかで、放課後帰ろうかと思ったたら、アヤカに捕まって、今までずっと図書館にいた」

「で、俺らは今から何しに廃病院跡に行かなきゃいけないんだ？」

ここまで聞くと、先頭を歩いていたアヤカが振り返って言う。

「入り口はあるのか、とか調べに行くのよ」

「入り口って、あそこは危ないぞ、ボロボロだし。何しに入るんだよ」

「決まってるじゃない！幽霊をとっ捕まえるためよ」

レイは、余りの事に泣けてきた。そのレイの鞆をアヤカが引つつかんで、さ、早く行かないと日が暮れるわよ？などと言って引つ張った。ユウキを見ると、なんか案外乗り気なようである。楽しそうだな、ユウキ、と言うと、

「探検とかなんかワクワクするじゃん。いいじゃん、見に行くだけだろ」

お前はDBの孫悟空か、とレイは思ったが、もうどうでもよくなつてついて行った。途中のコンビニでから揚げなど買って、ようやく町外れの戸野総合病院跡についた。既に日は沈み、雰囲気十分である。裏手は林というか、山のふもとになっている。遠くでカラスが鳴いた。

「思ったよりでかいのな。十階ぐらいあるじゃんか」

レイが言うと、アヤカは、ここなら間違いないわ、と言いな

がら正面玄関の前に立つ。ガラス張りの自動ドア形式になっているが、当然開かない。二、三回手で開いてみるが、びくともしない。

「レイ、叩き割ってよ」

「やだよ、怪我しそうだし。裏口とか探そうぜ」

「あー、裏口か」

が、それは探すまでもなかった。裏に回り込もうとすると、横に観音開きの扉があつて、目視しただけで開いているとわかった。

「お、ここから入れるね」

と、ユウキが言った瞬間、さび付いた扉がきしみながら開いた。レイはハウツと声を出し、ユウキは一步下がってしまった。ひとりアヤカだけはそのまま歩いて行って、扉を強く引いて全開にした。なんという怖いもの知らず、とレイは内心想った。

「うわー、すごい長い廊下だし。荒れ放題だわ。こりゃ楽しみ」

「何が楽しみなんだ」

と、レイとユウキは二人同時に突っ込んだ。

「あら、男の子が二人揃ってびびってるの？」

と、見下されて二人はいたくプライドを傷つけられた。

「ばば、バカ、びびってなんかないわ」

「そそ、そうそう。いくらでも探検できるつての」

「あつそ〜。よかったー。じゃあ後は羽野姉妹さえ都合がつけばいつでも捕獲作戦は実行可能ね！」

満面の笑みでアヤカはクルツと踵を返し、さつさと帰り道を歩きはじめた。羽野姉妹の都合が永遠にかなきやいいのに、と二人は思った。突如、廃病院のほうから生暖かい風が吹いてきた。レイは思わず身震いして、慌ててアヤカの後を追った。

その週の日曜日、アヤカは羽野家に遊びに行った。妹のシオンちゃんに会つためだ。シオンちゃんは、姉のアオイよりも随分活発な性格のようで、あつという間にアヤカと意気投合してしまった。くりくりした目と、ふつくらした輪郭の持ち主だ。そう言えばアオイ

も若干ふくよかかもしれない。人生ゲームを三人でしながら、アヤ力は色々と事前調査をした。

「それで、見える幽霊は何か話しかけてきたりするの？」

「うん、でも聞こえないふりするよ。相手したらずつと話してくるから。『あっち行つて！』って言うのとどっかに行くよ」

「危害を加えてきたりしないの？」

「うーん。金縛りとか？でも、シオンがふんつて気合入れたらすぐ解けるよ」

どうも相当強い靈感の持ち主らしい。アオイは、私はそんな事は出来ないわ。見えても見ぬふりなだけだわ、と言った。

「よし、じゃあさ、シオンちゃん、一緒に人類史を塗り替えて、大金持ちになりましょう！」

「何するの？シオン、テディベアの大きなぬいぐるみが欲しい！」

「そんなもの何百個も買えるわ。ただ、今度一緒に或る所に行つて、幽霊がいたら教えて欲しいだけなの」

「ふーん。別にいいけど。あ、それお手つき！罰金1万ドルね」

「く、このガキ……やるじゃないの。ともかく、じゃあ今週の土曜日は開けておいてね」

あのおとなしいアオイの妹がこんな性格だとは。さしものアヤ力にも想像出来なかったのであった。それ、私も行くの？と聞くアオイに、当然よ、持ち物多いしね、とあっさり返す。私は持ち物係なのね、とアオイは密かにため息をつくのであった。でも、シオンだけじゃまずいか、とも思っていた。シオンはまだ幼いから何も知らない、と。

「で、どうやってお前は幽霊を捕まえるのか、それだけ教えておいてもらおうか」

レイは、真正面からアヤ力を見据えていった。大体まともな方法を考えもせずに猪突猛進するのがアヤ力の常だからだ。月曜日、昼食を屋上で食べる、と言うお決まりの場所で、レイは、二度と同じ

失敗はすまい、と思っていた。

「な、何よー。怖い顔して。この前からちゃんと調べてあるんだから。いいこと、霊はエクトプラズムという方法で物体化されたこともあるのよ、つまり、実体を与えてやればいいのよ。とあるものを使えば実体化できる、そしてそれを網にかけるのよ。それがレイとユウキの役」

「とあるものって何だ」

「極秘企業秘密。土曜日になればわかるって」

とだけ言っと、もうその話には触れず、ウインナーを食べはじめるのであった。五月の風がとても心地よいが、レイの心は晴れないのであった。

いよいよ決行の土曜日になった。住所の関係で、全員が羽野家に一旦集まり、戸野総合病院跡に向かう事になった。時間は夜八時。九歳のシオンちゃんにはそれでも遅いのだが、アヤカが持ち前の強引さで押し切った。無論、親には廃病院に行くとは説明せず、みんなでカラオケに行く事になっている。アヤカら三人は合流して羽野家へ向かった。レイは大きなリュックサックをしょっているし、ユウキは大きなカバンを斜め掛けしている。みなアヤカに用意された網だの懐中電灯だのデジカメだのが入っている。当の本人は小さな手提げカバンのみ。

「これに幽霊を実体化させる秘密道具が入っているのよ」

「ふーん。ドラえもんみたいですね」

羽野家に着くと、二人と、母親が出てきた。三人の出で立ち（いでたち）に不信感を覚えた。

「あの、みんなでカラオケに行くんですよね？」

「もちろんそうです、あの、今日私たち登山に行ってたんで」

と、アヤカは三秒ではれる嘘をついたが、やはりアオイの母だけあって、深くは詮索せず、出発となった。今宵は風は暖かい。夜空を見ると、満月が、たなびく雲の隙間から良く見える。

「シオンちゃん、どう？この辺にはいない？」

「いないよ。あ、さつき首が取れたネコは見たけど」

思わずレイとユウキがひきつる。レイは、この日のために用意した、首からかけた八幡台菩薩のお守りを握り締めた。頼むから何も出るな、早く終わらせて帰るぞ、と思った。アオイはそんなレイを見てちよつとだけ笑った。そして、変な事にならなきゃいいけど、と思った。最悪の場合は私が被えればいいだけのこと、と思っていた。

「ここー？」

とシオンが聞いた。町外れの、山の裾に戸野総合病院跡は今日もそびえている。月光を受けてほのかに全体像が見える。迫力満点だ。「肝試しの会場としてここほど最適な場所もないな」

ユウキがわざと冗談めかして言う。が、誰も反応しない。レイが、肩に手を添えた。

「よーし！いざ行こう。こっちに入り口があるのよ」

アヤカを先頭に、五人は廃病院内に突入した。それぞれが懐中電灯をかざす。もっとも、今夜は月明かりがあるので、窓から入る光だけでも歩けないこともない。

「この病院が何故潰れたか知ってるか？院長が不倫して、奥さんに刺されたかららしいぞ」

「おい、レイ。誰がそんな恐ろしいトリビアの泉情報をこんなところで言えと言った」

一つ一つの部屋には、ベッドだのイスだのが無造作に転がっている。一行は、中央に階段を見つけた。

「下、下にきつという」

と、シオンちゃんが言った。何か感じるらしい。

「マジで？よし、じゃあ下に行こう」

と、相変わらず怖いもの無しのアヤカがさつさと地下に降りていく。なぜか、階下から凍える冷気が吹いてくる。この辺りで、男コンビの恐怖リミッターはほぼ限界に達している。アヤカ、シオン、

アオイ、男二人の順番で歩いていることになる。

「ちよつとお、レイとユウキはもつと前に来てよ。網で捕まえるの二人なのよ？」

「う、うつせ、わかったよ」

しぶしぶ二人は前に出た。地下は、一切の光の入らない漆黒の闇だった。何も見えない。一行は慎重に足元を照らして歩いた。すると、

「あ、あそこの奥にたぶん何人かいるよ」

と、シオンが言う。ちょうど突き当たりのところだ。

「奥にいるのね、じゃあ入らないと」

と、アヤカが懐中電灯の光を扉に向けた。扉の上に、微かに文字がある。レイが照らすと、そこに「霊安室」と言う文字が見えた。

「おお、おい、アヤカ、そこは……」

と、レイが言う前にアヤカは扉を引いた。鍵もかかっておらず、すーっと開いた。

「いるよ、奥に輪になって何か話してるね」

と、アオイが言った。アオイにも見えるのか。レイとユウキは霊安室に入る気は全くしない。さしものアヤカも、すぐには入らずに様子を伺う。

「見えない、。壁とタンスみたいなのしかない。よし、コイツの出番ね！」

アヤカが手提げカバンから秘密道具を出そうとした時だ。

「あ！」

とシオンちゃんが叫んだ。

「一人こっちに走ってくるよ！すごく怒ってる、どうしよう」

「そんなもの答えは決まってるさ」

レイが言った。と、同時にアヤカの手を引っ張り、シオンちゃんを抱きかかえて、一目散に来た道を走り出した。ユウキもアオイも続く。

「バカバカ！逃げたら捕まえられるじゃないのさ！」

引きずられるアヤカはポカポカとレイの頭をこづいた。しかし、金玉縮みあがっているレイにはそんなもの効きやしない。

「あー、あのおじさんだけついてきてるよ」

一行は一階へと辿り着いた。月明かりだけで、随分恐怖感が減るものだ。しかし、今のシオンちゃんの台詞を聞いて、レイらは慌てて周りを見渡す。

「あそこ。受付のところ。逃がさない、とか言ってるからまずいかも。相当強力な念だよ、どうしよう」

シオンが震えだした。いつもみたいにあっちに行けって言っても行かない、と言う。

「受付のところにいるのね！よーし！」

誰も止めるまもなく、広間を突き抜けてアヤカが走って行き、カバンから大きなスプレー缶を出して、プシューッと巻いた。

「瞬間冷却剤よ！さあ、実体をあらわせ！レイ、ユウキ、網の準備して！」

しかし、いつまで経っても何も変化はない。ただ辺りが寒くなっただけだ。

「アヤカお姉ちゃん、一歩ずつこっちに来て。そのままそこにいたら憑りつかれちゃう」

瞬間、アヤカは肩が重くなり、息が苦しくなった。思わず膝をつく。霊視可能な羽野姉妹には、先ほどの男の霊がアヤカに覆いかぶさっているのが見える。

「アヤカお姉ちゃん！」

シオンちゃんが涙目でなんとかしよう、と近寄ったときだ。アオイが、ポケットから護符を取り出して、何か祈りはじめた。動く事も出来なかった男子コンビは、そのアオイの意外な行動を、固唾を呑んで見守った。

「……………宿怨皆清浄如来元慈悲祈……………」

アヤカが、数回体を前後に振った。と、同時に意識がはつきり戻った。全員駆け寄る。

「とにかく、ここを出ましよう。性質の悪い霊がいくらでもいる」

「あつちからも、こつちからも集まってきてるよ。危ないよ」

「くーっ！悔しいけど撤退！残念だー」

と、一人納得しないアヤカを引きずって、一行はようやく病院の外に出た。帰り道に、アヤカがこんな事を話した。

「さつき、ワタシに男の人が憑りついた、んでしょ？ワタシ、その時、あの男の恨みを聞いたわ。助かるはずの手術で、医者 of 失敗で俺は死んだんだ、死にたくなかった、妻も子どももいたのに、死に切れない、って怒ってたわ」

「そんな人たちの魂をお前は捕まえて動物園に売るのか？」

「レイ、ワタシ、間違ってたよ。霊って、生きてた人たちの無念の魂なんだね」

アオイとシオンちゃんが微笑んだ。ユウキは、おお、アヤカがちよつと大人になったかも、と思った。が、次の瞬間アヤカは

「よし、幽霊はやめて、宇宙人を捕まえることにしよう！」

一同、しばし無言の後、口を揃えて言った。

「いい加減にしろお！」（第二章 終わり）

第三章 日本一のデザイナー

6月のある日曜日、姫小路彩華は母のゆかりと執事の時田爺と三人で繁華街へ服を買いに来ていた。いつも行きつけている百貨店を巡るのだが、アヤカにはどの服も地味に見えて触手が動かない。ゆかりは、そんなアヤカの趣向を見て、少し変わったのね、前までならそんなにこだわらなかったのに、と微笑んだ。アヤカは、通り一遍の無難な服を着るのはつまらないわ、と自分の着ている水色のカーディガンをつまみながら言った。

「ねえお母さん、百貨店以外の服を見たいわ。前もって場所は調べたから行こうよ」

「別にいいわよ」

荷物持ち兼運転手の時田爺はふと嫌な予感がした。アヤカの醸し出すオーラに危険な匂いを感じたからだ。その嫌な予感は、つい最近ボツワナと言う遙か異国にまでお供させられた時の経験が感じさせるものである。三人は百貨店を出て、駅近郊のファッションビルへ入った。

「ここよ、ここ」

見ると店名はファナティック・グラマーとある。店内に展示されている服は奇抜なものばかり。真っ黒なドレスまがいのもの、豹柄のズボン、迷彩柄のジャケット、意図的にぼろぼろに仕立て上げたカッターシャツ……。

「アヤカ、これはちょっと……」

とゆかりは言ったが、アヤカは気にしない。白のカッターにアメリカのポルノ女優が大きくデザインされたものと、髑髏模様が膝に書かれたストレートパンツを購入し、早速着替えてしまう。ゆかりと時田爺は目を合わせて苦笑する。時田爺は内心涙目である。名門の令嬢が胸に「Fuck me bull!」と書かれた服を着て街を闊歩するなど……。そんな思いは露知らず、気に入っ

た服を買えたアヤカはご機嫌一杯になって洋々と街を歩くのであった。

他にも、黒のボアのような薄地のセーターと、タイトで、鉾ベルトのついたピンクのミニスカートなどを購入したアヤカは、家に帰ってドレッサーの前で意気揚々と着替えなおし、鏡の前でポーズを取ったりしていたが、やがて普段着に着替え、二人は余裕で寝れる大きなベッドに横になった。どうも違うな。何かが違う。今ワタシの着たい服はこんなじゃないな。寝返りを打ちながら考える。突如跳ね起きる。そうだ、親戚の愛美おばちゃんはファッションデザイナーの仕事をしていたんだっけ！突如アヤカは走り、台所で料理をしているゆかりのところへ馳せ参じる。

「お母さん、ねえねえ、愛華おばちゃんは服のデザインしてたんだよね？」

「あ、あ、うん。でも今はフラワーコーディネーターに転職したのよ？なんか才能に限界を感じたとか言ってたかな」

「その才能はワタシに満ち溢れてるかもしれないわよ！ねね、連絡先教えてよ！」

母の携帯から早速愛美叔母さんの電話番号を手に入れた彩華は、いそいそと電話をかけるのであった。

「なんだこれは、」

今日もまたアヤカに引きずられ屋上へと連れて行かれたレイは、弁当を広げる間もなくポスターのような巻紙をアヤカに渡され、広げた。

「昨日夜中までかかって書いたＴシャツのデザインよ。表も裏もあるのよ」

レイが広げた画用紙には、白を基調とし、その上に孔雀の羽のような七色の模様をした羽が、ハートを模って書かれている。ハートの中にはブラックホールのような黒い宇宙と吸い込まれる光の矢が書

いてある。もう一枚渡されたほうを見ると、背中、裏の部分はまず英語で「Wake up! My load」と汚い筆記体で書いてあり、十字架の絵の上にピンクのハートが刺さっている。

「どう!? これを商品化したら売れると思わない? と言うかワタシはこのデザインのＴシャツを着たいの」

レイは色々な意味で驚いた。これまでのアヤカは比較的無難な服を着ていたし、こんな系統の趣味を持っているとは思ひもいなかったからだ。

「ハートが大好きなのはわかったけど、ま、意外と絵は上手なんだな、知らなかったぜ」

「あら、ワタシはいつも美術は５だったのよ。ねー、レイもこのＴシャツ着たいでしょ?」

「俺は男なんでハートの服はちょっと嫌だな」

「そうか。そう言えばこれは女性向けのデザインだったつけ。レイに相談しても意味ないんだった」

言うが早いか画用紙二枚と弁当を持ってアヤカは屋上から去っていった。一人取り残されたレイはブツブツ言いながら弁当を食べはじめた。

「キョウコ、ちょっとちょっと、これを見てよこれを」

屋上からまっしぐらに駆けて来たアヤカは、クラスの中では一番お洒落に気を使っている富士見恭子に声をかけた。いつも綺麗に髪を茶色に染め、爪をマニキュアで整え、上手に化粧をし、財布はヴィトンの最新のデザインのものを持つなど、洗練された美貌の持ち主だが、この子も相当の名家のお嬢様なのだが、得てして性格がお約束のように高慢であり、近寄りがたい印象がある。顔は整いすぎていてマネキンをも想起させる。

「なあに? 騒がしいわねいつものことながら」

渡された画用紙の絵に少し目をやり、そのインパクトに驚いてしばし声も出せないでいると、アヤカがこういう服を売りたいんだだけ

どうつ？と聞いてくる。

「売るって、どうやって？そんな簡単な事じゃないんじゃない？」

「あら、それはなんとかするわよ。ね、キョウコはこのＴシャツが販売されたら買う？」

「あはは、販売されたらねえ」

と、まるで相手にしていないのだが、超ポジティブ思考のアヤカは、それには気づかないで、次々と昼ごはんを楽しむ同級生達にデザインした絵を見せては、評価を聞いてみるのだった。そんなアヤカをキョウコは呆れた目で、しかしある事を思い出しながら見ているのだった。ついでにレイもその横で同じ目をしているのだった。

放課後、アヤカはいつものごとくテニス部をさぼり、一旦家に帰ると、時田爺に頼んで、少しばかり遠い郊外に住んでいる愛美叔母さんの家へと向かうのであった。愛美おばちゃんには昨日連絡してあるので、夕食を作ってもらって歓迎された。母のゆかりの妹で、2歳年下だ。一人息子の中学一年生の遼がいるが、まだ部活から戻っておらず、夫も単身赴任中なので、案外広い家は寂しそうに静まっていた。

「もうすぐ遼も帰ってくると思うんだけどね。それにしても彩華ちゃんももう16歳のねえ。」

愛美もゆかり同様おっとりとした育ちのよさを感じる。横の時田爺は、何ゆえにこのような家系に彩華のような娘が誕生したのか、と自問していた。

「ふふん。ところで、早速だけど昨日デザインした服を見てほしいの」

「はいはい、書くの早いのねえ」

愛美は渡された画用紙二枚を見て言葉を失った。なんとという前衛攻撃的な、と言うか先鋭的な、まさかこんな刺激的なデザインを見せられるとは。時田爺もそれを見て、なんとと言うアバンギャルドさ、しかし、先日 của ファッションセンスから考えるとある意味当然と言

うか、とあごを震わせていると、愛美は、

「なかなかいいんじゃないかな、こういう服は若い人に受けるかもしれないわよ？」

と言った。時田爺は意外な展開に驚いて目を見開いた。アヤカは得意満面の笑みで、

「ねー！いいでしょう！じゃあさあ、おばちゃんのコネを使って商品化してみてよ、お金はなんとかするからさあ」

「うーん。たぶん、商品と言うか、製品にする事は出来ると思うよ。でも、売るためには実績が必要だからね」

「えー。実績って何？」

「何かのデザイン賞を受賞するとか、あ、そうだ、ちょっと待ってね」

言つと、愛美は席を外し、やがて一冊の雑誌を手に持って戻ってきた。「Female future」と言うファッション誌だった。それをめくり、アヤカに見せる。そこには、第6回未来を担う英俊デザイナー賞、と言うことが書いてある。

「彩華ちゃんのセンスを考えると、ここが一番いいんじゃないかな」付帯事項を読むと、既存の発想に捉^{とら}われない斬新なデザインを求む、受賞者のデザインした服は製品化する、とある。

「ありがとうおばちゃん！ワタシ、これに応募してみる。この本貸してもらっていい？」

「いいわよ、あげるわよ。要はね、アヤカちゃん。もっと丁寧に書いて応募しないと駄目なの。デザインの基礎知識も知らないでしょ？何回か暇な日にいらっしやい。教えてあげるから。あと、もう少しデザイン工夫したほうがいいわね」

「わーい！ありがとうおばちゃん！大好き！」

横で話を聞いていた時田爺は、ま、これなら特に誰も迷惑を蒙る事もあるまい、と。

アヤカは、それから足しげく愛美叔母さんの元へ通い、最低限必

要なデザインの基礎知識を学び、図面の書き方を学んだ。それから、基礎となるあのTシャツのデザインを多少変え、背中をメインにする事にし、十字架を丁寧書き、そこへやはりピンクのハートを刺すことにした。言葉も「God wants love」に変えた。ここまではよいのだが、ふとアヤカは悩んだ。どうも孔雀の羽が上手く書けない。ネットで画像は見つかるが、物足りない。近所の図書館にある図鑑も駄目だ。やはり、実際に見ないといけない。そう決意したアヤカは、動物園に行くことにした。

「たぶん実際に手に入れるのは無理だと思うぜー」

行楽日和の日曜に下野動物園へ付き合わされる事になったレイはぼやいた。アヤカとデート自体はいいけれども、孔雀の羽を持ち帰りたい、と言うアヤカの願いは適わないだろうと思う。

「大丈夫よ。そのためにこれをもってきたんだもの」

と、肩に担いだ長細いボストンバッグを叩く。中身の予想がつかないが、どうせ聞いても答えないだろう、とレイは判断し、ともかくのんびりアヤカの後をついていく一日にすることにした。天気もいいので下野動物園はすごい人だかりだ。アヤカは一目散に鳥類のエリアに向かう。比較的広い檻の中に、孔雀が二匹いた。そこへ辿り着くと、アヤカはおもむろにまずデジカメで写真を取り始めた。ふとレイのほうを向く。

「この看板が邪魔だから肩車してよ」

「え、お前今日スカートじゃなか」

今日のアヤカは膝小僧ぐらいの丈の茶色のダッフルスカートを穿いている。そこに顔を突っ込むのは・・・などとレイが顔を赤くして躊躇していると、問答無用にアヤカが腰を下ろさせ肩に乗ってきた。もう知らん、とばかりにレイは足に力を入れてアヤカを持ち上げた。何枚か撮って満足したらしく、ひょいっと肩から降りたアヤカは、今度は例の細長いボストンバックを開ける。何が出てくるのかを思いきや、釣り竿である。

「ま、まさか、それを」

「そうよ、さて、先っぽにトリモチをつけて、と」

手元のもう一個の鞆からどこで買ったのかわからないトリモチを出してつける。周りの子供達が興味深々で見ている。檻の隙間から確かに入った。これならいけるのかも、とレイですら思ったとき、動物園の飼育係の人に見つかってしまった。

「お、お客さん、何をしていますか、困ります」

「うるさいわね。ただ羽が欲しいだけだから邪魔しないで」

孔雀が羽をばたつかせた。何枚か羽が舞う。

「あの、とにかく、孔雀が怪我したら困るんで、羽なら持ってきてますから釣り竿を檻に入れるのは止めてください」

「やったね！ありがとう、おじさん」

「最初から頼めばもらえたんじゃないか、これなら」

ともかく、念願の孔雀の羽を手に入れたアヤカは、ご満悦で動物園を後にしたのだった。

後、孔雀の羽を一生懸命書いて、小さな胸のハートマークに変えて、ともかくルールに乗っ取ったデザインの下書きは完成した。およそ二週間も頑張った。後はこれを賞に郵送するだけの段階になった。そこでアヤカはそれを保存用にコピーし、第6回未来を担う英俊デザイン賞に勇んで応募した。ところが、締め切りまで後1ヶ月ほどもある。アヤカはうずうずした。そこで、愛美叔母さんに頼んで、ともかく一枚でもいいから実際の製品にしてほしい、と懇願した。ここまでよく頑張った、と内心ほめていた愛美は、アヤカの我侭を聞いてあげることにした。かつて懇意だった服飾会社の社長に頼んで、アヤカのデザインしたTシャツを一枚だけ作ってもらう事にしたのだ。待つこと10日。遂に、アヤカのデザインしたTシャツが家に到着した。時田爺が部屋に持ってくるやいなや、筆るように奪い取り、ダンボールケースを開けた。そこには、アヤカがデザインしたとおりのTシャツがあった。

「嬉しい！思っていた通りのものができてる！」

すぐさま愛美叔母さんのところへお礼の電話をかけ、その次に家にレイを呼び出し、自分が着込んで見せる事にした。

「どれどれ、おお、ちゃんとＴシャツになってるじゃん、すごいな」「でしようー。これがワタシの着たかった服なのよ」

至福の表情を浮かべるアヤカに、レイは思った。これなら、賞を受賞するとかも二の次なんだろうな、売ると言うより単に作りたかったんだろつな、と思った。ところが、意に反し、アヤカはこんな事を言う。

「これなら受賞間違いなしよね。このＴシャツが街のお店に並ぶ日も近いわね。ウフフ」

「あー、えー、そんなに期待しないほうがいいぞ？だって、本気でプロになりたい人達が応募してるんだぞ？それをだな、昨日今日デザイン始めた人間が受賞できるなんて、」

しかし、レイはみなまで言えなかった。アヤカがすごく恨めしそうな目で見てきたからだ。まあいいさ、現実を知るのも勉強でしょ、とレイは思い、アヤカの家を後にした。でも、少し嬉しかった。アヤカが、何事かをきちんと形にしたことに。

一ヶ月経った。今日発売の「Female future」に第6回未来を担う英俊デザイナー賞の受賞者が発表される。アヤカは、昼休みに学校を抜けて近くの本屋まで走った。そして、さっそくFemale futureを購入した。息もつけずその場でめくる。あった、ここだわ。アヤカは息を飲んだ。ない。ワタシの名前がない。何度も何度も見直した。そこには、全然知らない人の名前があるのみだった。時間が止まった。アヤカは、しばらくそこに立ち尽くしていた。

昼休みの終わり、レイが教室で漫画を読んでいると、廊下から悪霊のようなものが入ってきた。それは悪霊ではなくアヤカであった。

思わずレイは駆けつけ、どうだったんだ？、と聞いた。アヤカは返事をせず、自分の机に突っ伏した。レイも何も言えずにそこを離れた。それを見ていたキヨウコは、ため息をつきながら、放課後あの話をするか、と密かに決意していた。

「アヤカ、今日は一緒に帰ろう」

と、キヨウコがアヤカに声をかけた。絶賛悪霊そのもののアヤカはかぶりをふるだけで肩を落とし歩いていく。

「賞は残念だったわね」

と、キヨウコは歩調を合わせ、淡々と話し始めた。

「私のお父さんの職業って知ってる？」

「知らない」

「画家なの。日本画の世界じゃ新進気鋭の逸材として注目されているわ。一枚2000万円ぐらいで売れるのよ」

アヤカが少し興味を示したので、二人で午後の風の気持ちよい街並みを歩きながら話を続ける。

「でもね、美大を卒業してからしばらくは全くの無名だったんだって。来る日も来る日も書いて、書いて、美術賞に応募して、落選して、また落選。」

アヤカが顔をこっちに向けた。

「でもね、諦めなかったんだって。俺にはこれしかないし、認められないのは自分が未熟で絵が下手だからだ、それ以外に何も理由はない、って思ってたんだって。必死に努力したんだってさ。何千枚も書いたらしいよ」

アヤカはハツとした。そうだ、ワタシ、たった一回落選しただけだし、その為の努力なんか何もしてなかった。

「言いたい事わかるかな。いきなり認められるなんて、そのほうが変だわ。そうでしょ？」

「キヨウコ、あなた、本当はいい人なのね、ありがとう」
すると、キヨウコは頬を赤らめながら言った。

「ちょ、勘違いしないで。私は別に、あの、その、あんたの落ち込みようが酷かったから、それで、」

アヤカはキョウコに抱きついた。その様子を遠く後ろから見ているレイは焦った。アイツ、まさか、ショックでレズに走るんじゃないだろうな！？レイは思わず二人のほうへ向かって駆け出した。

（第三章 完）

第四章 あなたにペット紹介します！ 前編

絶え間なく弱い雨がアヤカの差す花柄の傘を濡らす。梅雨の時期を迎えて、基本的にテンションの高いアヤカも心なしか元気がない。学校が終わり、部活のないレイと、部活をサボったアヤカは二人で何を話すでもなく歩いていった。すると、どこからか猫らしき鳴き声が聞こえる。

「レイ、猫が鳴いてる」

と、アヤカは声のするほうに向かっていく。レイも後に続く。
「見て、捨てられてるよ」

やや古いマンションの裏の空き地の、掃除用具入れの横に、ダンボールに入れられて、2匹の小さな三毛猫が雨に打たれて鳴いている。いや、泣いていると言ったほうがいいかもしれない。

「可哀相、震えてるよ。このままじゃ死んじゃう！」

「お、おいアヤカ。連れて帰るのか？」

「当たり前でしょう。あんたこの二匹を見て見ぬ振りが出来るの？」
言うのが早いか、傘を脇に置いて水に濡れて汚れたダンボールごと持ち上げた。そして、迷う事無くそれをレイに押し付けた。

「家まで運んで。後の面倒はワタシが見るから」

「お前んちドーベルマン飼ってるじゃん。ビスマルクが怒るんじゃないか？」

「ビスが何かグズグズ吠えたりしたらスリッパで叩くだけのことよ」
この言い分では普段ビスマルク、姫小路家の飼い犬はスリッパで叩かれているらしい。手元の子猫がミャーミャーと力なく声をあげている。

「子猫って何を食べるのかな。牛乳と食パンとかでいいのかな」

「俺も猫を飼った事がないからわからないぞ」

アヤカは誰かに電話して、こまごま聞きはじめた。レイは子猫二匹を見つめた。よかったな、とりあえずは助かったぞ、と声をかけ

た。ま、飼い主と言うか、お前らの救い主は少々アレだけだな、とも思った。

アヤカとレイは姫小路家についた。よく手入れされた庭園に、いつもながらレイが感心していると、先ほど名前の出たドーベルマンのビスマルクがすごい速さで走ってきて、案の定、子猫二匹に吠えはじめた。

「うるさい！あっち行きなさい」

アヤカが言っても聞かない。業を煮やしたアヤカは鞆を振り回した。ビスマルクは慌てて向こうのほうへ去って行った。レイは、見事な序列を見た、と思った。俺が犬でもアヤカには逆らいたくない。どんな報復を企むか想像もつかないからだ。などと思っていると、
「ありがとうレイ。後はワタシがどうにかするよ。まず、洗ってあげないと駄目だろうからお風呂に入れてあげるよ」

と、少し濡れた髪をかきあげながら言う。一瞬、なぜかアヤカの入浴を想像してしまい、レイは赤らんだ。そんなレイには気づかず、さつさとダンボールと子猫を引きとると、じゃあね、と言って家の中に入ってしまった。さて、どうなる事が、自分で飼うのかな、などと思いながら帰ろうとすると、少し離れた場所にいたビスマルクと目が合った。言いたい事はわかるぞ、と心で応じ、レイは帰っていった。

「お嬢様、お風呂沸きましたよ」

廊下でとりあえず二匹をタオルで拭いた後、お皿に牛乳とコーンフレークをやっていたアヤカの元に、お手伝いのばあやの園子が声をかけてきた。アヤカの生まれる前からこの家の家事全般を任されている人である。しかし、屋敷がやたら大きいので、あともう一人、若いお手伝いさんも週に三日はやってくる。基本的に姫小路家の家事はこの園子ばあやとゆかりでこなしている。

「ありがとう。ねえばあや、あんまり食べないよ、衰弱してるから

かな」

「そうかもしれませんねえ。犬猫病院に連れて行ったほうがいいかもしれません。風邪をひいているのかも」

「そうか。じゃあお風呂もまずいかなあ」

そこへ、執事の時田爺もやってきた。動物好きらしく、大いに同情的な顔でやってきた。

「お嬢様、ともかく洗ってあげて、暖かい毛布で包んであげて、それでもおかしければ病院に連れて行ってあげればいいと思いますぞ」
「うん、じゃあそうする。お風呂に入れて洗ってあげてくる」

アヤ力はそつと二匹を抱き上げ、跳ねるように風呂場に向かう。時田爺と園子ばあやは顔を見合わせて、優しい性格に育った、と喜びあった。

ジャージの手と足をまくって、雨と泥に汚れた子猫にぬるいお湯をかけてあげる。

「こら、動くな、どこへゆく」

基本的に猫は水が嫌いである。俗説によると砂漠から生まれたからだとか言われているが、実際は濡れても、水を振り払うと言う動作が出来ないため、冬などに死活問題になるので水に濡れるのを嫌うのである。しかし、そんな事は知らないアヤ力は、悪戦苦闘して引っかき傷などもらいながら、ようやくと二匹を洗い上げる事に成功したのだった。よく見れば、二匹は模様が違う。

「名前つけてあげちゃおっかな、キミはあつさりした模様だからアーサー、キミは背中模様がまだらだからマラダンね、決まり！」

と、一人悦に入ったものの、そう言えばこの子達はオスメスどちらかしら、と思い、一匹ずつひっくり返してみた。フニヤー、ギヤーと抵抗される。が、やがて二匹の股間にそれらしきものを発見したので、どちらもオスだと言う事がわかった。

「オスならアーサーとマラダンでいいね、ねー？」

二匹もニヤーンと答える。アヤ力は大事そうに二匹を抱きしめて、

時田爺に言つて、自分の部屋に毛布を用意させるのだった。

その夜、アヤ力は親子三人で食事をしながら、子猫二匹の話を話し合った。アヤ力としては飼いたいのだが、実は母のゆかりが猫アレルギーで、猫の毛を吸い込むなりすると、肌が荒れてしまうのだ。「だから、アヤ力、飼うのはあきらめてほしいの」

アヤ力もそれはよく知っていた。だから、飼うという選択肢は最初からあきらめていた。

「でも、保健所に連れて行ったりするのは絶対に嫌よ。殺すんでしよう、あそこは」

アヤ力はかつて見たテレビの特集を思い出していた。無責任に捨てられた捨て犬、捨て猫らは窒息死させられるのだ。その数、年間数十万頭に及ぶと聞いてアヤ力は怒りと悲しみを覚えたものだった。「誰か飼ってくれる人を探してみよう。アヤ力も学校で聞いてまわつてごらん。見つかるまでは家で面倒みよう。離れの和室か地下室にでも入れておけば、母さんもたぶん大丈夫だろう」

「私も飼つてあげてもいいのだけれどね、体質だけはしょうがないわ、ごめんね」

「ううんいいのよお母さん、よし、じゃあ明日から早速学校でもらつてくれる人を探してみるよ」

言うが早いか、食べていたパスタをほおぼり、あつという間に手にチーズを持つて食堂から飛び出して行つた。

翌日も小雨が降っていたが、アヤ力は元氣一杯に学校に走った。いつもより早く教室に辿り着き、席を眺め回し、知っている限りのクラスメイトの家族構成や住宅の種類を思い出して、目星をつける作業にかかっている。すると、扉を開けて、アオイが入ってきた。密かな靈能力の持ち主であるこの子の家は、庭付きにもかかわらず、何も飼っていないかった！早速アオイに交渉を開始する事にする。

「おはようアオイ、今日も美人ね」

「おはよう、なに？お世辞なんか言つて」

「これを見て欲しいの」

と、昨日携帯で取っておいたアーサーとマラダンの画像を見せる。

「可愛い子猫ね、猫を飼い始めたの？」

「うん、そうだけど、そうじゃなくて、昨日雨の中広場に捨てられてたのを拾ったの。でもね、家はお母さんが猫アレルギーで飼えないの」

「なるほど、それで、私にもらつてくれないか？つてこと？」

「そうなの、どうかな？」

アヤ力は真剣なまなざしでアオイを見つめた。アオイも満更でもない顔をしている。

「二匹は無理でも、一匹くらいなら飼えるかも。それに猫つて基本ほつたらかしていいしね、犬なら散歩とかしないと駄目だけでも」

「いやっほう！それじゃ、一回家に帰つて親に相談してみてよ！なんなら今日にも連れて行くよ」

「その写メちょうだい。お母さんに送つてみる」

予想以上に話がトントン拍子に進んだので、アヤ力はご機嫌になって、次々と登校してくるクラスメートに同じように話をしてみた。しかし、後の人は反応がよくない。大体分かった事は、ペット好きの人は既に何かを飼っているし、そうでない人は全然興味を示さない、という事だった。困ったアヤ力は、授業中にペンを回しながらどうしたものかと思案していると、隣の席のキョーコがこんな事を言ってきた。

「ねえ、捨て猫のもらい手探してるなら校内なりその辺の電柱なりにポスターでも貼つたら？」

「あ、なるほどお。それはいいアイデアね！さっすが！」

キョーコはツンと横を向く。しかし、内心はアヤ力同様捨て猫にいたく同情していたのだった。

「な、なんならポスター貼りとか一緒にしてあげてもいいよ。私暇だし」

「本当！じゃあさあ、今日家に来て子猫見にきなよ。可愛いだよ、手のひらぐらいの大きさしかないのよ」

「うん、じゃあ行くわ。ついでにポスターの文章も考えてあげるわよ。アンタじゃどうせスーパーの特売品チラシみたいな作るでしょうし」

「何よ、失礼ね。まあでもそれじゃお願いするわ」

こうして、アヤカとキョーコと、後親にともかくその猫を見てきて、と頼まれたアオイの三人は、一路アヤカの自宅に向かうのだった。

翌日、手に大量のポスターを手にしたアヤカが今日も誰よりも早く学校にやってきた。キョーコも早起きして一緒に登校し、そこかしこの目立つ所にB3サイズのポスターを貼り始めた。昨日、嬉しい事に、アオイ家がアーサーの引取りを即断してくれた。それにはあのオテンバ霊能力者のシオンちゃんの動向が大きかった。夕方に姫小路家に来るなり、アーサーをとても気に入って、連れて帰ると行ってさっさとアオイと共に帰路についた。さしものアヤカですらも、大丈夫かしら、と思ったものだが、その後の電話で家のOKが出たとの事。それを受けて、アヤカとキョーコは、残った一匹、マラダンのみをデジカメで撮影し、この子をもらって下さい、生後間もないです、との文言と連絡先を書いたポスターを50枚ほど作製し、今日に至るのだった。全部張り終えて、アヤカは連絡を待った。それはすぐに来た。聖マリオヨッシ学園は小中高一貫のエスカレーター学園なのだが、連絡は中部部の男の子からだった。ちょうど猫が飼いたくて探していたから、見せて欲しいとの事。早速アヤカはその少年、中学一年生の敦クンを家にまで連れて行き、マラダンに会わせた。

「まだ本当に子供なんだね。小さいね。赤ちゃんみたい」

などと言いながら、敦クンはこわごわ見ている。付いてきたキョーコが抱き上げて、敦クんに抱っこさせてみる。

「暖かい。生きてるんだね。お前、ウチに来るかい？」

と聞くとニャオーンと鳴く。そうか、来るんだね、と言うと、敦クンはこちらを振り向いて言う。

「俺、この子を飼うよ。お母さんと一緒に、日曜日にももらいに来ていい？」

「もちろんよ！可愛がつてあげてね。それまでは預かっておくね」
商談ならぬ縁談は成立した。敦クンは満足げに帰っていった。

「ふう、これで私の仕事も終わりね。ポスターはがしとかないとね」と、キョーコが微笑んで言った瞬間、アヤカの携帯が鳴った。

「はい、もしもし、あ、そうです私です。……あ、その件なんです、もう貰い手が見つかったんです、はい、すみません、ありがとう」

アヤカは電話を切った。

「しょうがないよね、一足違いってやつよ」

と、キョーコが言った瞬間、またアヤカの携帯が鳴った。また、猫を見てみたい、との内容で、断るしかなかった。

「もう明日には貼ったポスターはがさないと駄目ね」

「うん、そうだね」

と答えながら、アヤカの頭には違う事が思い浮かばれているのだ。キョーコは首をかしげながら、マラダンの頭をなでた。（

第四章後編へ続く）

第四章 あなたにペット紹介します！ 後編

その日の夜、縁談が決定し、敦クンの家にもらわれていく事が決まったマラダンに膝に抱っこしながら、アヤカはネットを使いのあるサイトを見ていた。それは、都内の動物愛護センターから飛べる里親のリンク集だった。そこに載っている子犬、子猫たちは、何日かの期限が経って、引き取り手が見つからなければ、無残にも殺されてしまう。

「マラダン、見て。この子たち、何日か後に殺されるのよ。何も悪い事してないのに」

アヤカは両の目から涙を溢れさせていた。その滴が、マラダンの頭に落ちた。マラダンは、ニャーと鳴いてアヤカの手を舐めた。

「一匹でも多く、この子たちを救ってみせるわ」

昨日キョーコと作ったポスターのテンプレはエクセルファイルで保存してある。アヤカは、目に留まったポメラニアン画像を取り込んだ。

翌日もアヤカは朝早かった。園子ばあやが驚くほど早起きし、慌しく食パンをかじり、マラダンにお別れの挨拶をして出て行った。その様子を母のゆかりも時田爺も見ていた。

「自分のことだけじゃなく、誰か、何かのためにもハッスル出来るのね、あの子」

「日に日に成長されておりますね」

今日もらっていかれるマラダンは時田爺の手の中にあつた。つかの間のご主人アヤカを名残惜しそうに見送っていた。

学校に着くなり、昨日貼った分のポスターを片端からはがし、今日作った分に張り替える。そこへ、教師の一人がやってきた。

「おい、姫小路君、そんなところにポスターを貼ったらいかんよ」

「どうして？別にいいじゃないですか。誰かに何か迷惑かけた？」

「せめて誰かに許可をもらわないと」

「あーうるさいなー、わかりました、わかりましたよ」

言うのが早いのか、校長室に駆け込んだ。謹厳実男校長は突如入ってきたアヤカに目を丸くした。

「校長先生、お願いがあるんです。可哀想な殺される子犬を助けてあげたいんです。だから校内にポスターを貼る許可をください！」

言うのが早いか目を潤ませる。今回のアヤカは『マジ』なので、迫力が違う。校長先生はその勢いに押され、汗を拭きながら許可を出した。

そして、またぞろ一生懸命ポスターを貼り替えていると、キョーコがやってきた。

「おはよう、アヤカ、また新しい捨て猫でも見つかったの？それとも、敦クンに断られたの？」

「おはようキョーコ。ううん、敦クンの親は今日のお昼に取りにきてくれるよ。ワタシは、他の子を助ける事にしたの」

ポスターを読んだキョーコは事情を理解した。キョーコも捨て犬、捨て猫が残酷に処分されている事を知っていた。同時に、限きりがないとも思ってしまった。新しい飼い主を見つけても見つけても、また今日も明日も新たな子犬、子猫が無責任な飼い主に捨てられる。

「でも、何もしないよりはマシよ。一匹、二匹は救えるかもしれないじゃない！昨日だって、あつという間に四人も希望者が見つかったよ」

キョーコも頷いた。何もしないよりマシ、か。付き合えるだけとことんやるか。キョーコもポスターを貼り始めた。ポスターの下段には『姫小路ペット紹介センター』と書いてある。私もその一員になるか、と微笑んだ。

「どうするんだ？これからずっと引き取り手探しを続けるのか？」

レイは昼休みに、アヤカの前に椅子を持ってきて聞いた。アヤカはサンドイッチを食べながら、フグムグと頷く。

「と言うか、あのポスター見て思ったんだけど、欲しいって言う人が見つかったらどうするの？」

「都内の動物愛護センターに連絡して、引き取り手が見つかりました、って言うて殺すのを止めさせるわ。近いうちに必ず迎えに行かせます、って」

「なるほど、な。なるほど」

隣の席で食事を取っているキョーコが言う。

「学校内だけじゃいずれ拉致があかなくなるから、近所の電柱とかにも貼ったほうがいいと思うわよ」

「そうだね、ただ、貼りまくると今度ははがして回るのが面倒・・・でもないか」

どうやらその役目はレイに決定したらしい。でも、レイ的にも今回アヤカがやっている事には賛同できるので、文句は言わないことにした。ダイヤモンドティアラを作るだの幽霊を捕まえるだの言われるよりよほどやりがいのあることだ、と自分を納得させることにしたのだった。

三日で大体一匹の引き取り手が見つかるようになった。その度に、レイはユウキなどを誘って、街中に貼ったポスターをはがして回った。もちろんアヤカ本人やキョーコも付き合った。ある休日の午前中、黒猫の引き取り手が見つかったので、動物愛護センターに連絡をして、アヤカは携帯をパタンと閉じた。

「これで十匹救えたのね」

少し嬉しくなったので、また次助けるペットを探すために、パソコンを立ち上げた。そして、動物愛護センターのサイトに辿り着く。また、新たな捨て犬が何頭も増えている。一体、誰が捨てているのかしら？突如、アヤカに激しい怒りが湧き起こって来た。一度、実際に行って話を聞いてみよう。レイに電話して、いつものように運

転手を時田爺に頼み、アヤカは実際に都内の動物愛護センターへ行ってみることにした。

約三十分ほどで着いたその建物は、夏を控えた太陽に照らされて、随分と小奇麗に見えた。アヤカはその印象に意外さを覚えつつ、ドンドンと中に入っていく。受付でペットを見にきたんですけど、と嘘をつく、すぐに場所を案内された。広い通路を奥に向かうと、展望の開ける中庭のような場所があり、そこに無数の首輪につながれた犬がいるのが見える。アヤカはまなこを決した。レイも、なんとも言えない怒りを覚えた。さらに中に向かうと、係りの人が餌をあげてまわっている。大小のガラスケースや檻に、数え切れないほどの子犬、子猫、のみならず、成犬なども混じって入れられている。そのどれもが曇りなき純粋な目でアヤカらを見つめている。

「全部連れて帰る！」

突如アヤカが大声を出した。レイが驚いていると、ガラスケースをひっくり返そうとし始めた。慌てて時田爺と二人で止めると、今度は外に出て子犬をつないでいる紐を解こうとする。やめろ、無茶言うな、とレイが止めると大声で、この子達みんな殺されるのよ、可哀想かわいそう、とわんわん泣きはじめた。レイが肩を抱くと、アヤカはレイの胸にすがって泣いた。その声のみがいつまでも辺りに響き渡っていた。

ようやく泣き止んだアヤカをなだめながら、とにかく帰ることにした。すると、センターの手前に、一台のバンが止まった。それには、『金儲成ペットショップ』とロゴが書かれている。レイは思わず立ち止まり、様子を見てみると、二人ほど男が降りてきて、後ろから大きな籠を四つほど出してきて、センターの中に入っていった。アヤカもそれを見ていた。レイが、思わず駆け寄った。

「おじさん、その動物どうするんだ？まさかここに置いていくのか？」

「うん？そうだけど」

片一方の男が胡乱な目つきでレイに答える。この野郎、当たり前みたいな顔しやがって！先ほどのアヤカの号泣の影響もあるのだろう、普段切れないレイも堪忍袋の緒が切れた。おおおーっと声を上げて、その男に掴みかかった。時田爺が止めに入る。が、間に合わず、レイはその男に足払いをかけて、押し倒した。同時に、男が持っていた籠のふたが取れ、中から小さな柴犬が顔を出した。事態を理解できず、悲しそうに吠えた。センターの中から人も出てきて、ようやく二人を引き離れた。

「この悪魔め！命を平気で奪うな！」

センターの職員に羽交い絞めにされながら、レイは言わずにいらなかった。アヤカもまた泣いていた。今度の涙には、レイへの感謝の気持ちもこもっていた。

帰りの車の中で、二人は静かに嘆いていた。まだ若い二人にはどうしようもない大きな問題、高い壁にぶつかったのだった。時田爺は車を運転しながら、今回の事は悲しい事だが、これを糧にきつと二人は成長するだろう、とも思っていた。二人はそつと手をつないでいた。時田爺は、少なくとも、今後ビスマルクがスリッパで叩かれることはなくなるのではないか、と思っていた。（第四章 完）

エピソード レイの思い出

どうもみなさん、改めまして、睦月令二ことレイです。今夜は僕が皆さんに、姫小路彩華、アヤカとの馴れ初めなど話そうかなと思います。僕の親父は某省庁に勤める国家公務員で、そこそこいい給料をもらってます。でも地味な人で、お袋に尻に引かれてるってとこかな。お袋は関西出身なので、まあわかりやすい賑やかオバちゃん化してきてます。勉強ベンキョウと鸚鵡のようにいつも言ってるうざいですが、はい。性格はどっちにも似てないかなあ。クールだねとか言われる時もありますが、あんまりわかりません。小さい時からあんまり手のかからない子どもだったようです。そんな僕は、一応私立の幼稚園に入られて、アヤカと出会ったわけです。髪の毛を二つくりにした、恐ろしく賑やかな女の子。動き回っているか、一心不乱に何かを作ったりしているか。先生の言う事を聞かないのは当たり前、幼稚園から抜け出すのも当たり前。ある時、僕が運動場で縄跳びをしている横で、ほうきに細長いダンボールを刺して回していました。何のおまじないかと思ってみていると、アヤカと目が合いました。

「ちよつと、手伝ってよ」

「何を？」

「一緒に回して。スピードが足りないみたいなお」

よく分からないままに、一緒にダンボールが刺さったほうきを回しました。でも、当然何も起こりません。すると、アヤカはかんしやくを起こして、こう言いました。

「おかしい！竹トンボみたいに空に飛び上がらない！」

言うのが早いか、その場にほうきとダンボールを投げ捨て、どこかへ走っていつてしまいました。ま、要は昔からこういう子なのです。その時はなんだあの女の子は、と思いました。

その後、帰る方向が一緒だったり、同じクラスになったりしたこともあって、アヤカとは仲良くなりました。どうしてか、僕の事を気に入ったらしく、レイ、レイと近寄ってきては、何かして遊ぼうと言って来たり、休みの日には家族ぐるみで遊園地に行ったりしたものでした。アイツは高いところとか、お化けだとか、普通の女の子が怖がりそうなモノは一切平気でした。三回連続でジェットコースターに乗らされた時は死の予感がしました。この子は何者だ、と思ったものです。こちらが真っ青になってベンチで休憩している時も、空中ブランコみたいなのに乗ってはしゃいでいたのもよく覚えています。幼なじみ、と言えばそういう関係なのでしょうが、残念な事に、学校の成績でも、徒競争の速さでも、中学に上がるまでは全くあいつに適いませんでした。今では体力はまあ勝っているでしょうが、力学関係はどうもまだ下にされているようです。トホホ。

やがて、小学校に上がりました。聖マリオヨッシ学園と言う、地元では有名なエスカレーター学校です。そのおかげで僕は余り真面目に勉強しない駄目生徒なわけですが、アヤカは勉強も好きなようで、二年生と四年生の時に同じクラスでしたが、よくまあ先生に質問していました。お前専門の家庭教師か、と突っ込みたくなるような、しかし、その質問内容は的確で、例えば理科の時間に、宇宙の果ての向こうには何があるんですか、とか、先生も答えに困るようなものが多かった、と記憶します。それで、先生が答えられなかった事は、図書館なんか調べに行くような子でした。そんなキャラだから、みんなに愛されると言うか、ある種特別扱いされていて、それでいて影で笑われる存在と言うか、でも張本人はそんなのは全く気にしない性格で、いつもやりたいように、生きたいように生きている子でした。財閥の令嬢的な風は一切ふかさないし、気取らないし、一緒にいて楽しいヤツです、はい。

中学校に上がっても、キャラには一切変化はなく、ただ、少しずつ

つ体だけはでかくなっている、失礼、大人の女性に近づいていると言っている感じがした。中一の夏休みに、自転車で日本一周をする、と言いついて聞いてなくて、せめて横浜一周にして、との親の意見を受け入れて、一人で旅立って行きました。でも、もちろん影では執事の時田爺さんがずっと後を追いかけて見守っていたのだけでも。アヤカに一番振り回されているのは絶対にあの爺さんだと思う。アヤカのせいで寿命が10年は縮んでいるとみた。そして、その次は間違いなく僕でございます。ある時、人気アイドルのコンサートに行きたいと言いついて。一緒に行かされることになり、そこまではいいんだけど、直接会いたい、泊まってるホテルは知ってるから、コンサートが終わってから忍び込もうよ、と言われ、嫌だと言った。その場で泣き出すので（アヤカはいつでも泣ける女だ。自分の武器をよく知っています）、しぶしぶ某ホテルの裏の窓から忍び込むと、あっさり警備員に見つかり、アヤカだけは逃げ去り、僕はこっそり絞られました。僕を置いて行くというその行動にも泣いたが、その後の逃げ送れたアンタが悪いのよ、と言う台詞にも泣きました。男なら一発ぐらい殴ってるところでしたね、ええ。

そして、高校へ進学した後の事は、皆さんご存知の通りです。なんだかんだ言いつて、だいぶ成長してきたと思いますね。特にこの前のペット事件以降、少し落ち込んでいた時期もありますが、動物愛護関連のNPO法人に寄付なんかして、アヤカなりに今後捨てペットの問題に関わるつもりようです。自分のためではなく、何かのために行動するようになった。僕は、そんなアヤカのことやっぱり好きなんです。これらからも、どうぞ僕らを見守ってやってください。では、最後に、あの日の夜アヤカから来たメールを紹介して、僕の思い出話を終わろうと思います。では皆さんごきげんよう。

件名 今日ありがとう

まだ起きてる？今日は我がまま、と言うか、いつも我がままばかり言ってる私だけど、いつもいつも何も言わないで付き合ってくれてアリガト 言えなかったけど、レイがあんのペット業者に
つかみかかってくれてうれしかった じゃなきゃ、ワタシが
ポカポカ叩いてたと思う

その後、ずっと手をつないでくれてたのもうれしかったよ
そうじゃなきゃ、悲しくてずっと泣いてたかもしれない

これから仲良くしてね ワタシちょっとずつ大人になるからね

あとがき

さて、四話ほど書いた姫小路彩華シリーズですが、一旦ここで話を終えようと思います。元ネタのハルヒシリーズもそうなのですが、ある程度経つと、「―の憂鬱」から「―の溜息」と言う風にタイトルが変わっていくのですね。それを真似しようと言うわけですが、実はただ単に、もう「挑戦」ネタが思いつかない、と言うのが本当の理由だったりもします（笑）。

基本的にはライトノベルは読まない僕ですが、涼宮ハルヒシリーズだけは手にとってみました。それは、筆者自身もハルヒ同様宇宙人だの幽霊だのに人並み以上の好奇心を持っているからです。その方面で話を膨らませても良かったのですが、オマージュにも限度がある、と言う独自の美学もどきに基づいて、第二話のみを不思議系にし、後はオリジナルにし、アヤカに笑ったり泣いたりしてもらいました。

今回の作品は「キャラクター小説」になるのですが、書いてる本人は当初「とにかく面白い話を書こう」ぐらいにしか考えておらず、キャラクター小説の根幹である「主人公の魅力」なんて殆ど頭にありませんでした。それを某所で指摘され、三話目ぐらいから、試行錯誤しましたが、上手くいったかどうかわかりません。むしろ、第四話なんてコメディの要素が殆ど消えてしまい、作品の方向性を見失った、と言われても仕方ない流れになってしまいました。そういうことも含め、一旦ここでリセットし、今後の展開の目処が立ち次第、次作を書くなら書こうと思います。ここまで読んでくださった皆さん、ありがとうございました。ではまた別の作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079g/>

姫小路彩華の挑戦

2010年11月12日16時25分発行